



文責 本宮小学校長 佐久間仁

県 PTA 研究大会Ⅱ

〔分科会（講演）〕

*要約



◇演題 子どもの Well・Being を育む人との関わりを通して、UD（ユニバーサルデザイン）の学校・家庭・地域づくり
講師 齋藤 忍氏（発達支援室「ひだまり」代表）

〇はじめに

・健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態（Well・Being）にあること。

・学校は、様々な多様性、多くの個性によって構成される。（家庭環境、習得スキル、教育的ニーズ、興味関心、障害、知的発達水準、認知特性、国籍、言語、文化、性など）SLD（局限性学習症）、A

SD（自閉スペクトラム症）、ADHD（注意欠如・多動症）など、発達障害に関する研究・臨床・教育に携わる者にとって、Well・Being は当たり前の視点。
・映画「さかなのこ」のさかなくんのように、発達障害をもちながらも自分らしく生きている子は、弱点を補うだけでなく、強みを育んでもらっている。鍵は「人との関わり」保護者・学校・地域が連携し、正しく理解し、互いに認め合い、高め合う中で育まれる。これは、発達支援の分野では、昔から目指してきたこと。Well・Being は当たり前の考え。
・「やれるだけやった」と自己肯定できる、自分を認め、自分を大切にできる子に育っている。そのため、「あなたは、あなたのままでいいんだよ。」と言ってくれる大人がそばにいることが必要。

〇ひだまり

・発達障害（SLD、ASD、ADHD など）をもつ子どもたちが通う施設。診断名があっても、理解ある対応をしてもらえず、二次障害（不登校、愛着障害など）を引き起こすこともある。共に過ごす中で心がけていることは、よき理解者であること、孤立させないこと。SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）や学習支援、

面接、学校訪問など行っている。

・背景要因を見極め、声なき声に耳を傾けることが大切。そのため①自己理解を促す。②どうすれば困難さを軽減できるか、自己支援力を高める。③合理的配慮を求める力の獲得などを目指している。

〇認め合い高め合う学校文化の創造

・特別支援学級が学校のまん中にあるH小学校

・教室の位置、研究紀要も最初・管理職から教職員まで子の成長を名前で語り合える学校

・通常学級担任が「特支の子どもも自分の学年の子ども。スペシアルな教育が必要だから、スペシアルな場で、スペシアルな先生に指導を受けている」と考えている。
・特支の研究授業を全ての教員が参観し、事例研修で共に講師の話

を聴き学ぶ学校
・特支の研究授業で、自分の学年の子どもが何を目標に、どのような手立てで、何を学んでいたかを、クラスの子どもたちに語りかける教師集団

・M小学校での「みんなが分かる
・できる・楽しい授業づくり」
・「教科教育」と「特別支援教育」は車の両輪。支援が必要な子に「ないと困る」支援は、どの子にも「あると便利な支援」

〇SDS学校づくり

・「学級経営」と「個別支援」は車の両輪。「集団としての機能が失われた学級」では、「個別支援」が通用しなくなる。（逆効果も）
・授業が上手な先生の授業は、ユニバーサルデザインになっている。（様々な手立てが講じられている）

〇SDS家庭づくり

・観察上手になろう（行動は具体的に観察する）

・ほめ上手になろう（いいところを探してほめる。ほめるところをつくってほめる。よくない行動をしていないことをほめる）
・整え上手になろう（子どもが落ち着ける環境、学びやすい環境をつくる。ちよつとした手がかりがあることで、できなかったことができるようになることも）

・伝え上手になろう（わかりやすい声かけ）
・教え上手になろう（行動を要素に分ける。ちよつどよい量のお助けをする。できたときのほめ方・関わり方を決める）

〇おわりに

・学校・家庭・地域で子育てにユニバーサルデザインを
・その子の得意なこと、長所を伸ばそう
・そのために、私たちは子どもたちの「良いところ応援団」に